

平成28年度
児童・生徒福祉作文コンクール
入賞作品集



【作文コンクール表彰式】

社会福祉法人 北見市社会福祉協議会

目次

作文部門【小学校高学年の部】

最優秀賞	福祉を知って	北光小学校六年	山崎 千晴	一頁
優秀賞	人に優しい町北見	北光小学校六年	加藤 誌花	二頁
優秀賞	この学習を通して学んだこと	北光小学校六年	神田 樹	三頁
優秀賞	福祉について学んだこと	北光小学校六年	佐藤 結南	四頁
佳作	人に優しい町北見	北光小学校六年	樋口 慈	五頁
佳作	福祉・障がいについて	北光小学校六年	渡邊 璃乃	六頁
佳作	福祉について	北光小学校六年	坂本 莉夢	七頁
佳作	福祉について	北光小学校六年	吉田 夕桜	八頁

作文部門【中学校の部】

最優秀賞	福祉について自分達中学生にできること	南中学校二年	我妻 利泰	九頁
------	--------------------	--------	-------	----

作文部門【高校の部】

最優秀賞	ADHDが導いてくれた私の夢	留辺蘂高等学校三年	芳賀 朋香	十頁
優秀賞	インターシップに向けて	留辺蘂高等学校三年	小泉 千広	十一頁
佳作	私たちは平等	商科専修学校三年	石澤 楓帝昭	十二頁
佳作	児童・高齢者の虐待を防ぐために	留辺蘂高等学校三年	小澤 愛香	十三頁
福祉作文コンクール実施要綱				十四頁

【小学校高学年の部】

最優秀賞



福祉を知って

北見市立北光小学校 六年 山崎 千晴

「苦手も障がいの一つだと思います。」

私はこの言葉を聞いて、「私もみんなも障がいをもっているんだな。」と思いました。

私は苦手なことがたくさんあります。楽器をひくこと、漢字を書くこと、計算すること、どれも苦手です。でも、これが障がいだなんて思ったことはありません。だけど、この前きていただいた、山田さんの「苦手も障がいの一つだと思います。」

という言葉聞き、障がいがあるのは、特別なことではなく、みんながもっているものなのだ、と感じました。

私は今まで、手や足が不自由な人や、全盲の人を見るたびに、「かわいそうだな。」と思っていました。だから、障がいのある人は、特別にしてもらった方がいいと考えていました。だけど私は、山田さんのお話をきいて、障がいがあるか

らといって特別あつかいをしたり、「かわいそう。」というのではなく、普通の人と同じように接するべきなのだと思いました。

最近では、生まれつき全盲なのに、ピアノがひけたり、足が不自由なのにバスケットボールをしたりと、障がいがある人がとても活躍しています。私も「障がいがあるのに、こんなにすばらしい演奏ができるんだ。」と、とてもおどろきました。だから、障がいがあるからといって、なにもできないわけではない、できないことはほんの一部なのです。つまりそれは、苦手のある私達とかわりません。

なのでこれからは、障がいがあるからといって特別あつかいはせず、それでもその人が困っていたら、手伝えるようになりたいです。





優秀賞

人に優しい町北見

北見市立北光小学校 六年 加藤 詩花

私は、北光タイムの時間で車イスのことを学びました。最初に学んだことは、車イスの各部の名称です。「ハンドリム」などのむずかしい名前があつて、あまりわからなかつたのですが、車イスは車イスに乗っている人にすごく役立つと思ひました。

車イスの開き方、閉じ方も学びました。私は、開き方、閉じ方を教えてもらつて、これなら足が不自由な人でも、開きやすく、閉じやすいと思ひました。

車イス体験をしてみました。学校の中を車イスでまわりました。車イスをあつかうのは、ものすごく大変で簡単ではありませんでした。特にエレベーターに乗る時や、段差を上がる時は、助けが必要だと思ひました。他にも、車イスで障害物をよける時や、スロープを下る時などの車イスでスピード調整するのもむずかしく、車イスに乗っている人は、毎日こんなに大変な思ひをしてると思つたら、外で車イスを使つたら、外はちゃんと車イスでも使いやすい道になっているの

か、ということが疑問に思つてきました。

外で北見市社会福祉協議会の人たちに教えてもらひ、車イス体験をしました。私は、前に疑問に思つたことが早く知りたくて少しわくわくしていました。北見市社会福祉協議会の人たちから、交差点の所をわたるときは、押す人が車イスをうしろ向きにしてわたるんだよという、車イスの人たちを安全に押す方法などを学びました。特に、押すのがむずかしかつた所は、歩道でした。歩いてるときはあまりわからなかつたのですが車イスを押しているときに、車イスがだんだん道路の下がっていくのがわかりました。すごく危険だと思ひました。歩道は雨がふつたときに道路の方に流れていくために、ななめになっているそうです。まだ、車イスの人に使いやすくは、なつていませんでした。

テルベの人たちが来てくれました。私は、車イスに乗っている人の話を聞いて、テルベの良さ、車イスになつたときの心境を知りました。スポーツ用の車イスに乗って体験するはずだったので、早退してしまい、貴重な体験ができませんでした。でも、車イスの人たちに対する、テルベの人びとの優しさやテルベの人びとに対する車イスの人たちの感謝の気持ちなどが、つたわつてきました。

このことから、もし、車イスに乗っている人がいたら、手を差しのべたいと思ひます。



優秀賞

この学習を通して学んだこと

北見市立北光小学校 六年 神田 樹

私はこの学習を通して、色々なことを学びました。車いすの性質や、障がいの人の話などを学べました。テルベの方々に話をしてもらったり、実際に車いすに乗って学校の中で押したり、押されたり普段ではできない貴重な経験を授業でしたり、とっても楽しい授業になりました。車いすに乗ってみて、やっぱり不便な所がたくさんありました。ちよつとしただんさんの所でも衝撃が強かったりと色々と不便な所もありましたが、便利な所もありました。車いすに乗って感じたことは、やっぱり自由に動くことが出きないので私たちは、自分の足で歩くという事はすごく幸せだということを私は感じました。テルベの山田さんの話をきいて、かわいそうだなと思いました。でも山田さんは車いす生活になつてもくじけずに、今も生活している所がすごいと思いました。交通事故で背骨などをおつて下半身がまひして生きる希望をなくしていても今の、山田さんは精いっぱい生き生きと車いす生活

を送っている山田さんは本当にすごいと思いました。

この学習を通して、やっぱり自分の足で歩くというのはどんなにすばらしいことかということ強く私は感じました。もし旅行に行った時などに体が不自由な人、車いすに乗っている人に対して「かわいそう」などという感情をもたずに、優しく声をかけてあげて、障がいの人のやくに立てるようになりたいです。また、山田さんのように希望を失った人に、実際にきいた山田さんの話をしてあげて、自分の手で生きる希望をなくしてしまった人の心を少しでもとりのぞいて、あげられるようになりたいです。

この学習で感じたこと、思ったこと、聞いたことを活かして生活していきたいです。





優秀賞

福祉について学んだこと

北見市立北光小学校 六年 佐藤 結南

私は、福祉について学んだことがあります。それは体に障害を持つている人のことです。私は学習でその中の一人に話を聞くことができました。その人が「下半身に障害を持っている山田さん」です。山田さんは、テルベという会社で働いています。テルベとは、フランス語で緑の大地という意味です。そのテルベという会社には、山田さん以外にも障害を持った人が十七名も働いています。たとえば、知的障害、下半身の障害、内部の障害、聴覚障害です。さらに私は、山田さんがどうして車いす生活になってしまったのかも聞くことができました。それは、山田さんが二十五才のときの話です。平成二年の仕事帰りに交通事故にあってしまったときから、車いす生活になってしまいました。山田さんは、病院に入院することになり、そのとき、入院すれば足は治ると思っていたそうです。でも、入院しても足は良くならず、病院の先生に、「君の足は、もう治らないかもしれない。これからずっと、車いすかもしれない。」と言われたそうです。それ

から山田さんは、退院し、家に帰ってもいいことになりました。でも、車いすの山田さんは、エレベーターに乗るとじやまものあつかいされたり、何度もかわそうと言われたり、山田さんは、とうとう家にひきこもってしまったそうです。でも、ある日、一人の人にスポーツやってみないと言われて山田さんは、マラソン大会に出たそうです。他にもいろいろなスポーツをやり心が大きく変わりました。その理由は、自分の足はまるいものになっただけだと思ったからだそうです。私はその言葉を聞いて、「ああ、そういわれればそうだな。」と思いました。

私は、福祉について学び、障害をもった人のこと、車いすのことなどを学習しました。障害の人のことを学び、障害の人は、ふつうの人と一部だけちがうだけだと思いました。私はこれからの生活で、障害の人を大きく差別せず一緒の人間として生活していこうと思いました。





佳作

人に優しい町北見

北見市立北光小学校 六年 樋口 慈

私は北光タイムの学習で車イスについて勉強しました。車イスの学習でわかったことがたくさんあります。それは、車イスにのっている人の大変さです。車イスにのっている人は、北見だけでも何千人といえるのです。そして、北見でしようがいを持つている人は、およそ、五千七百五十四人もいます。なので車イスの人にもしあつたら「何かおてつだいすることはありますか？」と聞くのが私はいと思います。そして車イスの人は、長時間すわったままだからだが車イスの形になって、かたまってしまうそうです。なので少しづつからだを動かしたり、ストレッチをすることが大切なんだそうです。そして車イスをもし買うことになったら、スキー用車イスが一〇〇万円、バスケット用車イスが六十万円、マラソン用車イスが八十万円だそうです。どれも五十万円をこしてはいてすぐ高いきんがくですよね。

そしてこのことから、私は、車イスの人はものすごく大変だと思いました。そして車イスの人には、やさしく声をかけ

てあげたり、車イスをおしてあげたら車イスの人のやくにたてると思えました。そしてこのことをしようらいにやくだてたいと思えました。そしてもし、おばあちゃんが、車イスにのることがあつたら車イスをおしてあげたいと思えました。テルベのみなさんが来てくれたときにいろいろ話してくれました。一つ目は、エレベーターがないときは、どうするのだろうか？と言う質問のときは、四人がかりで、かいだんをのぼるそうです。二つ目は、障がいをもって通勤することができるとかという質問では、通勤することは、できますと言っていました。そして、テルベのみなさんが言っていたのが「あいさつ」と言うひらがなをつかって、ことばをつくるという事です。「あいさつ」の、「あ」は、明るく、「い」は、いつも、「さ」は、最初に、「つ」は、伝わるようにという意味だそうです。

私は、このことをしようらいにかします。





佳作

福祉・障がいについて

北見市立北光小学校 六年 渡邊 璃乃

私は、六年生になって総合の勉強で障害について、車いす体験をやりました。

まず私はこの授業が始まる前は障害をもっている人についてなにも知りませんでした。ただ一つ知っているとえば障害をもっていてとても大変そうだなという事位でした。車いすを一人でそうさするのもむずかしく、車いす体験ではペアの友達ばかりに押ししてもらっていました。福祉協議会の人が来校された時には外で車いす体験をやり、道路のでこぼこがありとても大変で車いすに乗っている人の苦勞が改めてわかりました。

次に株式会社テルベの方々が来校してくれました。テルベではしいたけをさいばいしたり印刷業をしている会社です。テルベで働いている車いすの山田さんは、バイクに乗っていて交通事故にあい脊髄を損傷してしまい、車いす生活になんてしまいました。事故にあつてすぐ山田さんは、病院からな

は「君の足はもう一生動かないんだよ。」と宣告され、退院してからも家に引きこもりがちになり町に出れば邪魔者あつかいをされ山田さんは外に出るのもいやがるようになりました。その時テルベという会社ができるんだよと、友人に教えてもらい山田さんはテルベで働くようになりました。今では車いすバスケや色々な事をしているそうです。私はこの話を聞いて町に出れば邪魔者あつかいをされたと聞いてそんな事は絶対にしないようにしようと思ひ、また障がい者についてどんな事をすれば良いかと考えさせられました。

次に福祉・障害・ノーマライゼーションなどの言葉の意味を学びました。福祉とは↓幸福。障害とは↓さまたげ。ノーマライゼーションとは↓等生化。この3つの意味を辞書で調べるとこのような意味ができました。私は障害や福祉の意味をまちがえて覚えていましたが、この機会ですべての意味をわかって良かったです。

この勉強で福祉の事や障がい者の事、色々な事を学べて福祉協議会の方や、株式会社テルベの方々が来校してくれたからこそこの勉強がなりたつたと思います。この勉強を役に立つ日がくれば教えてもらった事を使えるようになりたいです。



佳作

福祉について

北見市立北光小学校 六年 坂本 莉夢

私は、テルベのことについて、障がい者の方たちのことを知りました。私は、今まで、障がいをもっている人が働ける場所は、本当に少なく受け入れてくれる所もほとんどないと思っていました。でもテルベでは、障がい者も働けます。

そこでそのテルベで働いている山田さんのお話をききました。山田さんは、まだ若いうちに交通事故で下半身が自由に動かせなくなってしまうました。そこから山田さんの、車イス生活がはじまりました。山田さんは、車イス生活になつてから、今までかんたんだった家のだんさも1人じゃこえるのは、むずかしくなつてしまい外出もむずかしく、外に出るは、歩ける人にじゃまものあつかいされたり、かわいそうとか言われると山田さんは、本当にきずついでしまいます。だから私は、困っていたらもちろん助けるけどそういう障がいをもった人を見ても何も言わず、チラチラ見ず障がいをもっていない人と同じふうにしてあげるのが一番いいのかなあと私は、思います。私も山田さんの話を聞くまでは、ちら

ちら見たり差別した感じの言葉をかけていました。でも山田さんから聞いた話で、私は、今までのことを見直そうと思いました。私がいちばんすごいなと思ったのは、車イスに乗ったままするスポーツです。山田さんは、そのスポーツのおかげで良い体験ができ、車イス生活でも楽しくなっていました。私は、山田さんが車イスの生活でも本当は、楽しいんだと思いました。

障がいをもっている山田さんに会って、思ったことは、仲間と一緒に楽しいことは、ふえると思いました。

山田さん、テルベのみなさんから聞いた話で、私は、もしこれからなにか自分たちにできることがあるのならきょうりよくしていこうと思いました。





佳作

福祉について

北光小北見市立北光小学校 六年 吉田 夕桜

私は福祉の意味をあまり知りませんでした。でも、テルベのみなさんが教えてくれて、改めて福祉の意味を知る事ができました。そしてテルベのみなさんは車イス体験や障がい者の人達についても、お話してくれました。その中でも山田さんのお話が一番心に残りました。山田さんは二十五才で交通事故にあり、下半身が動かなくなっていました。車イス生活を送る事になってしまったそうです。最初はとても信じられなくて、めいわくをかけるなら死んでしまいたいと思った事もあったそうです。でも、そんな時に同じ障がい者の方にスポーツ大会にさそわれて行ってみると、自分よりあきらかに障がいがある人が楽しそうに笑っているのを見て、自分もそのスポーツに参加したそうです。山田さんはスポーツ大会で何回も優勝した事があるそうです。私はとてもすごいなと思いました。なぜなら、死んでしまいたいと思った事もあったのにやりがいを見つけるとこんなに変わるんだなと思いました。

山田さんはこんな事も言っていました。「普通の生活より、今の方がいろいろな事に努力したり、人の優しさに気付きました。」私はすごく前向きだなと思ったし、この言葉は車イス生活で努力した人にしか言えないし、分からないと思います。

私は山田さんの話を聞いて、とても感動しました。山田さんはとっても前向きで、何事にもチャレンジしてすごいなと思いました。

そして私は、改めてあいさつは大切だと思います。「あ」は明るく、「い」はいつも、「さ」は最初から、「つ」は伝わるように。この意味はきつと差別をしないで、みんなが平等になるように作った言葉だと思います。なのでこの言葉のとおり世界が平等になればいいと思います。



【中学生の部】

最優秀賞



福祉について自分達中学生にできること

北見市立南中学校 二年 我妻 利泰

僕は、高齢者の方や体に障害を抱えている方と交流させていた。機会がありました。そこで僕は、体が思うように動かない辛さや物事を思い出せない苦しさを、知ることができました。だから僕は、地域または、自分達のような中学生や高校生だからできることを提案したいと思います。

まず1つ目に、自分の学校では、福祉の授業でオレシリングを取得しています。オレシリングを利用し、挨拶運動をしたら良いと思います。なぜ挨拶運動をしたら良いのかというと、老人ホームのボランティアに行ったとき、お年寄りの方に「小学生や中学生の子達と、もっと交流したいけど、恐くて話しかけれない」と言っていました。だから、常日ごろ小中学生が地域の方に挨拶することで、いざという時抵抗がなくなり、地域の方と交流が深まるだけでなく、認知症

で困っている方にも、自然に声をかけることができるので、安全にご家族の元に戻ることができます。僕達、南中学校の生徒から率先して挨拶運動を行い、いずれは、いろんな地区で興味や関心を持つてもらい、人への思いやりが広まると良いと思います。そして、この運動を行うために発信して、協力してもらう力が必要と、考えます。だから自分から行動をおこし、周囲の人達に伝え、さらに輪を広げてもらい、どんどん広まっていくと良いと思います。

どんな時でも、挨拶運動などを通して、地域のお年寄りと直接関わりを持つことで、福祉は人ごとではなく、自分の事と捉えることができ、どこかの誰かのために、何かしらの行動をおこそうと皆は、思うはず。そうなれば、人と人の輪が広がり、交流が増えて温かい気持ちになれる地域をつくりあげる事ができます。そのため、自分達ができることから1つ1つ取りくんできたいです。



【高校生の部】

最優秀賞



ADHDが導いてくれた私の夢

留辺蘂高等学校 三年 芳賀 朋香

私は、障害を抱えている方に対して「ごめんなさい」という言葉が頭に浮かんだ。私自身も今では、昔はそんなことする事は無かったのと思うほど一年生の頃は警察にも家族にも歯向かい、父親には殴ったり蹴ったりするほど様子が一変した。二年生の秋頃、母と一緒に病院に行き多項目の検査を行いADHDと診断された。ADHDとは注意欠陥多動性障害とも言われている。二年生から福祉の授業を選択し、自分でも勉強していたのでそれなりの知識を持っていた私は自分で理解することが出来た。この障害は、「AD」と「HD」に分かれている場合があり、私の場合は注意欠陥を意味する「AD」を持っている。常に物を壊したり無くしたり注意されていて内容も理解出来なかったりと様々な症状があった。現在は病院にも通わず薬も飲むことなく過ごせるだけ改善されてきた。中学生の頃まで周りで見かける障がい者

の事を、馬鹿にするような目で見ていた私はこう思った。「今回ADHDになったのは、今まで馬鹿にしてきた自分への天罰だ」と。障害を抱えている人だけではなく高齢者も自分一人では出来ない事も周りの人にサポートしてもらいながら出来ないことも出来るように必死に努力していると思うと、今まで不本意でも「あの人変だな」とか変な目で見たり馬鹿にしたりしていた自分がとても恥ずかしくその人たちにも申し訳ないと思った。だから私は、高校ではもちろんだが進学して様々な知識や資格を得て介護の職に就き、障がい者や高齢者などサポートを必要としている人たちの力になりたい。また、それまでの経験を活かして介護の魅力、そして高齢者や障がい者が努力して一生懸命生きていることを高校生や専門学生など様々な人に教えていきたいと思う。そのために残りの高校生活と勉強や自分に出来ることを全力でやっていきたい。





優秀賞

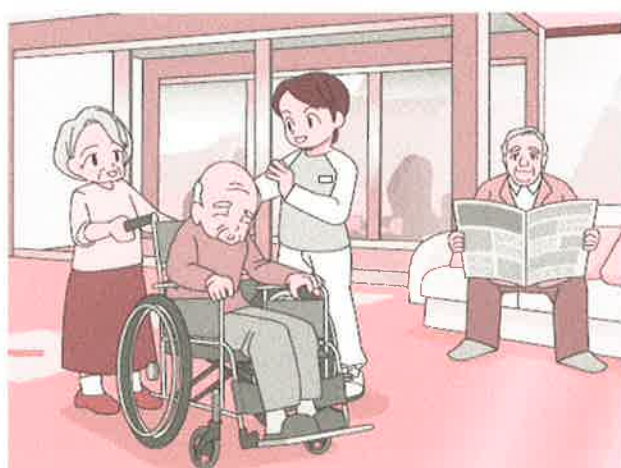
インターンシップに向けて

留辺蘂高等学校 三年 小泉 千広

私は留辺蘂高校で福祉の授業を選択するまで、正直まったく福祉に興味がありませんでした。中学の頃も福祉に対してはまったく興味がありませんでした。しかし、高校の選択授業で福祉という選択科目があつて、もしかしたらこの先自分の親やじいちゃんやばあちゃんの介護をするときに何か自分も力になるのではないかと思い、福祉科目を選択してみました。

私がこの授業を選択するまでは正直、「今の日本は高齢化なんだなあ」とぐらいしか思っていませんでした。授業では、実際に介護の現場に行つてインターンシップを行うなどという経験もできて良かったです。実際に現場に行つてみると思っていたよりも大変で職員の方を見てみると、常に動いていて利用者さんに話しかけたりしていてすごいと思いました。私もそんな職員さんの姿を見ていて、自分も頑張つて何かしたいと思ひ利用者さんとお話しさせてもらいました。最初の方は良かったんですが、時間がたつにつれて無言の時

間が多くなつていって逆にあまり慣れていない私が利用者さんに気をつかつてもらつていような感じになってしまいました。夏休み中にもう一度老人ホームに訪れる機会があるので、次はしっかりできるように頑張りたいです。二年次のインターンシップでは、とても貴重な経験ができてとてもいい思い出になったので良かったです。





佳作

私たちは平等

商科専修学校 三年 石澤 楓帝昭

私はこの三年間で様々なボランティア活動をした。主に、北見のイベントの参加や募金活動や障害者との交流など数多くやってきた。

この中で、一番実感出来たことは、障がい者との交流だ。川東の里とあさひ45、ぽっぽハウスに行くなど交流を深めた。では、まず障がい者とは一体何だろうか。

障がい者とは、何らかの原因によって長期にわたり日常生活または社会生活に相当な制限を受けざるを得ない人を指すと記されている。

次にどういった障害があるのか。一番例を挙げるとすれば、発達障害と知的障害、精神障害などがある。ここからは、話題を変えよう。

私は障がい者との交流を深めるだけで、関わるのが好きになった。また、学校にいる三人も障がい者である他私の従兄弟も障害がありこういった面でも関わるのが好きな理

由の一つでもある。それだけではなく、実は私も障害がある。私は子供の時から言葉の使い分けや対人関係に弱かった。だけど、今は少しずつ進歩してきている。こういったことで深めることは良いものの私には一つやめて欲しいという願いがあつた。それは、障がい者に対する差別だった。今から三年程前に障がい者差別解消法が施行されたが、なかなか差別は止まらなかった。こういった差別は私はたくさん見てきた。中でも、一番酷いのが、「汚い、触りたくない、気持ち悪い」などだった。

実際、私の従兄弟も過去にいじめを受けており、引きこもる程の可哀想な過去を語ってるのを聞くだけで涙が出た。私は、「障がい者は動物ではない、ロボットでもない、私たちと同じ人間だ」と思った。しかし、こういった考えは私だけではなかった。戦後間もない頃の「社会福祉の父」と呼ばれた、糸賀一雄という小説家がいた。彼の作品に「この子らを世の光に」というのがある。これは、戦後空襲で家族を亡くして精神障害が生じてしまった児童に何が出きるのかを考えていくことや障害の人たちの差別をなくすような社会作りなど私にとっても合うお気に入りの本の一つである。

最後に、私は今こう感じている「障がい者は私たちと同じ人間で基本的な人権の尊重の基で生きているのだ」ということを。



佳作

児童・高齢者の虐待を防ぐために

留辺蘂高等学校 三年 小澤 愛香

最近、ニュースで親が子供を殺してしまう事件や介護施設などで高齢者に暴力をふるいケガをさせてしまうといったことをよく耳にする。では、一体なぜこのようなことが起こってしまうのだろうか。私はこの件に関して、育児や職場でのストレスが原因で虐待してしまうのではないかと思う。虐待が原因でケガだけではなく心にも深い傷を負ってしまう。また、このことが原因で人間不信になってしまう場合もある。そのような人が増えてしまえばやりたいことも出来ずに社会の中をうまく渡り歩くこともできなくなってしまうのではないだろうか。さらには、生きることによって疲れてしまい自ら命を絶つことを選択してしまう人がでてきてしまうと思う。このようなことを減らすためにも、私は、世話する側の人間のストレスを減らさなければならぬと思う。たとえば、施設や何か相談できる機関を増やして相談員の方と一緒に頑張って解決していくことが必要だと思う。また、高齢者への暴力においても目上の人への尊敬の気持ちは絶対に忘れては

いけないことだと思う。当然、自分より長い間生きていて、人生経験も豊富なことから敬う気持ちに重点を置き、意識することが大切なのではないかと思う。

これらのことを含めて少しでも虐待のない社会になればと思う。また、これから介護福祉士を目指す者として高齢者への敬いの心も忘れないように努めたいと思う。



平成28年度
児童・生徒福祉作文コンクール
入賞作品集

平成28年9月

編集 北見市社会福祉協議会

【北見市社会福祉協議会 地域福祉課 ボランティア係】

北見市ボランティア市民活動センター

〒090-0065 北見市寿町3丁目4番1号

TEL 0157-61-8181 FAX 0157-61-8183

ホームページ <http://www.kitami-shakyo.or.jp/>

メールアドレス vola-senter@kitami-shakyo.or.jp
